

## 2. 女性像—岡田三郎助 VS ピエール・オーギュスト・ルノワール

創業以来、美を追求してきたポーラにふさわしい主題「美の女神たち」のセクションでは、岡田三郎助とルノワールの描いた東西を超えた女性美の競演を目玉に、女性像をご紹介します。ルノワールは印象派が新しい表現として求めた日常での女性の美しさに始まり、さらに新たな表現を探究する上で、古典的な表現に回帰し伝統的な主題によって女性の美しさを表現しています。明治期にフランスに渡り、日本の洋画の黎明期を築いた岡田は、ルノワールが追究したような、従来の日本に無かった女性美の表現方法を学び、自らのものとして日本の女性の美しさを表現していることが、共通点のある3つのテーマから見とれます。

### 身づくろいをする女性



ルノワール 《髪かざり》1888年 岡田三郎助 《あやめの衣》1927年

ルノワールは髪を整える寛いだ姿を正面から描き、岡田は身支度を整える女性を後ろから描きました。同じく身づくろいをする女性の姿が描かれていますが、岡田は後ろからその姿を描くことで日本的な奥ゆかしさを表現しています。

### 森の中の裸婦



岡田三郎助 《裸婦—水辺に立てる》1931年(昭和6) 《水浴の女》1887年

ルノワールは印象派展での活動を離れた後、古典的な表現に回帰し独自の表現を追究していきます。《水浴の女》は、伝統的な主題であるヴィーナスを想起させます。岡田は日本にはなかった裸婦の主題をフランスで学び、日本の女性をモデルに描いた作品です。

### 夢みるような女性たち



岡田三郎助 《少女像》1908年頃(明治41頃) ルノワール 《レースの帽子の少女》1891年

ルノワールも岡田も、10代半ばと思われる可憐な少女を描いています。頬杖をついて思索に耽る姿は、西洋絵画では伝統的なメランコリーのポーズで、岡田が洋画を学びにフランスへ渡った際に学んだものと考えられます。《レースの帽子の少女》も頬杖はついていないものの、夢見るような表情で思いに耽っているようにみえます。また《少女像》は、岡田が審査員を務めていた美人写真コンテストとの関連も指摘されています。

## 3. 東洋陶磁

中国、韓国、日本の古陶磁からなる約200点の東洋陶磁のコレクションを、晩年の鈴木はとりわけ気に入っていたようです。その中心は中国陶磁で、漢時代から清時代まで体系だった収集がなされています。それらの収集は、昭和30年代から40年代、日本で「第二次鑑賞陶器ブーム」の起こった時期に本格的になされたと考えられ、磁州窯陶磁や明時代の色絵磁器などは、日本人らしい好みをよく示しているといえます。なかでも、親しみやすいあたたかみと洗練とを兼ねそなえた、清時代の康熙五彩の作品が名品揃いである点は、鈴木ならではのコレクションの特徴といえるでしょう。



(左) 五彩花唐草文細口瓶(康熙五彩) 景德鎮窯 清時代 17-18世紀  
(右) 吹青五彩花鳥文瓶(康熙五彩) 景德鎮窯 清時代 17-18世紀

### コレクター鈴木常司 美へのまなざし 第Ⅱ期 モネとポーラ美術館の絵画

- 【会期】 2012年10月5日(金)—2013年2月26日(火) 会期中無休  
 【主催】 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館  
 【会場】 ポーラ美術館 (神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285) Tel : 0460-84-2111 / Fax: 0460-84-3108  
 【出品点数】 約300点 【開館時間】 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)  
 【入館料】

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生(土曜日無料)	700円	500円

## News Release

### ポーラ美術館 報道資料



### ポーラ美術館開館10周年記念展

## コレクター鈴木常司 美へのまなざし

### 第Ⅱ期 モネとポーラ美術館の絵画

10.5 [金] - 2013. 2. 26 [火]

ポーラ美術館のコレクションは、ポーラ創業家2代目の鈴木常司(1930-2000)が戦後、1950年代末から40数年をかけて収集した作品群です。総数約9,500点におよぶ、西洋絵画・日本の洋画・近現代の日本画・版画・彫刻・東洋陶磁・日本の近現代陶磁・ガラス工芸・化粧道具など多岐にわたるコレクションは、戦後の個人コレクションとしては質・量ともに日本最大級の規模を誇ります。鈴木常司は寡黙な人物であったため、コレクション生成の経緯や美術作品について語った言葉は多くありません。開館以来、私たちはコレクションと対話しつつ、この寡黙なコレクターの美を求めるまなざしに迫ろうと努力してまいりました。開館10周年を記念して開催される本展覧会では、鈴木常司の知られざる人物像とその美意識に関わるコレクションや手がけた文化事業を、12のテーマにより全展示室でご紹介します。また、展覧会会期を3期に分け、第Ⅱ期では西洋絵画コレクションの重要な柱のひとつである19世紀絵画の巨匠、クロード・モネの作品の特集展示をはじめ、東洋陶磁、江戸の化粧道具をご覧いただけます。

【報道に関するお問い合わせ】 ポーラ美術館 広報事務局 担当: 増田、小椋、三井 Tel 03-3575-9823 / Fax 03-3574-0316  
 ポーラ美術館 学芸部広報担当: 比良田(ひらた) Tel 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108



## 「コレクター鈴木常司 美へのまなざし 第Ⅱ期 モネとポーラ美術館の絵画」みどころ

ポーラ美術館開館10周年記念展「コレクター鈴木常司 美へのまなざし」は、コレクションの中でも人物像と関わりの深い作品群から、12のテーマを設定し、知られざるこのコレクターの人物像を分析し、ご紹介するものです。第Ⅱ期では、日本最多を誇る19点のモネ・コレクションを軸に、美を追求してきたポーらしい主題である女性像、晩年の鈴木自身が一番自信のあるコレクションと語っていた東洋陶磁を中心に展覧します。

### 1. モネーコレクターの特徴を顕す日本最多のコレクション19点

鈴木常司のコレクターとしての特徴は、体系的に作品を収集したこと、明るい色調の作品を選んでいること、バランスのとれた構図による完成度の高い作品を好んだことの3つが挙げられます。これらを最もよくあらわしているのが、モネのコレクションです。

#### 体系的であるーモネの画業が迎えるコレクション

睡蓮、太鼓橋、積みわら…鈴木常司は、画家の特徴がよくわかる代表的な主題の描かれた作品を集めました。最初から代表的なものを網羅的に収集しようとしたわけではなく、体系的なコレクションを目指して収集した結果、現在の充実したモネのコレクションが形成されたといえます。作品を体系的に収集するようになったのは、美術館でのコレクションの公開を意識してからと推測され、1993年の新聞紙上で「いずれ公開の場を持ちたい」と語っています。ポーラ美術館のモネのコレクションは、モネの画業を迎えることのできる貴重なものです。印象派の画家として活動を始める以前、ブーダンから戸外でスケッチをすることを学んだ時期の作品から、印象派の画家たちと開催した「印象派展」に参加していた時期、印象派の活動から離れ、「積みわら」、「ルーアン大聖堂」、「睡蓮」と連作を創作した時期まで網羅しています。鈴木は、モネの特徴がよくわかる代表的な主題を、年代を追って集めていますが、特に日傘を持った女性が描かれた作品は是非コレクションに加えたいと探し求めたといえます。また、モネの風景画、人物を描いた作品のほかに、静物画も収集したいと、第7回印象派展の出品作品《グラジオラス》も入手しています。

#### 明るい色彩を好む

鈴木常司は、明るい色彩の作品を好みました。この傾向はモネの連作のコレクションによく顕れており、同じ主題で描かれた作品のなかでも、より明るい色彩の作品を選んでいることがよくわかります。例としては「ルーアン大聖堂」や「睡蓮」が挙げられますが、例えば「ルーアン大聖堂」では、冷たく陰鬱な色彩の多い連作の中でも、夕方6時のバラ色に輝く明るい色調のものを、「積みわら」は、モネが1890年代に描いた画面を覆うような大きさを積みわらが配置され、抽象絵画と見紛うような作品ではなく、1880年代に描かれた、鮮やかな色彩と明暗の強いコントラストで、降り注ぐ太陽の光を表現したものを、「睡蓮」は荒々しい筆致で描かれたものではなく、丹念に仕上げがなされた完成度の高い作品を選んでいきます。

#### バランスのとれた構図による完成度の高い作品を選んでいる

モネは若い頃より優れた構図の感覚を発揮していますが、1880年代に入って場所やモチーフを定めて制作を行なうようになると、限定されたモチーフを巧みに配する構図の妙は、作品に不可欠な要素となっていきます。鈴木常司のコレクションのなかでも、《ジヴェルニーの積みわら》や《セーヌ河の日没、冬》はそうした特徴をよく示しています。また、「連作」を中心に、画面全体にわたって筆致の入念に重ねられた、完成度の高い作品が多くみられる点は、鈴木の何事につけ丁寧さを重視する性格や経営者ならではの厳格な美意識を物語っています。

## ポーラ美術館のモネ・コレクション



上段(左から右へ): 《貨物列車》1872年、《セーヌ河の支流からみたアルジャントユイユ》1872年(《貨物列車》の下)、《花咲く堤、アルジャントユイユ》1877年、《グラジオラス》1881年、《グラジオラス》1881年、《グランド・ジャット島》1878年、《ヴァランジュヴィルの風景》1882年、《セーヌ河の日没、冬》1880年  
下段(左から右へ): 《国会議事堂、バラ色のシンフォニー》1900年、《サルテ運河》1908年、《ジヴェルニーの冬》1885年、《エトルタの夕焼け》1885年、《バラ色のポート》1890年、《睡蓮の池》1899年

### モネ・コレクションと鈴木常司

#### 日傘の女をモチーフにした作品



《散歩》1875年  
鈴木常司は、日傘を持つ女性が描かれたモネの作品を長い間探していました。そしてやっと手に入れた作品がこの《散歩》です。

#### 明るい色彩のルーアン大聖堂



《ルーアン大聖堂》1892年

鈴木常司は、ルーアン大聖堂が描かれた作品を長い期間にわたり探したようです。この作品が手元に届いたとき、その開梱の様子をじっと見守りました。

#### 「積みわら」と「駅」ー代表的な主題



《サン＝ラザール駅の線路》1877年  
《ジヴェルニーの積みわら》1884年

「積みわら」と「駅」はモネの代表的なモチーフで、鈴木が長く探した作品です。モネは1880年代と1890年代に積みわらの連作を多く制作しましたが、鈴木が求めたものは1880年代に描かれた色鮮やかな積みわらでした。鈴木が明るい色彩を好んだことがこの作品からもうかがえます。また、鈴木は印象派の画家たちが描いた主題として特徴的であるといえる近代的な都市風景を描いたモネの作品をもとめ、駅や列車を描いた作品を集めました。なかでもサン＝ラザール駅を主題にした作品は貴重で、日本で収蔵されているのは本作だけです。



《睡蓮》1907年

#### 整った美しさの睡蓮

モネが描いた睡蓮の連作は200点あまりにのぼります。多く描かれた睡蓮の中でも、鈴木が求めた睡蓮は、可憐に美しく描かれたものといえます。水面の色調も明るく、睡蓮の花が丸みを帯び、真珠のような輝きをたたえて描かれています。同じ睡蓮にも、荒く激しいフォーヴィスムを思わせるような筆致のものや、暗い色調の水面に描かれた睡蓮もあり、この作品を選んだところには鈴木常司の嗜好がよくあらわれているといえるでしょう。

### コラム「印象派のコレクションについて」

最初買った印象派の作品はドガのパステル。  
印象派の作品を本格的に購入したのは、1990年代～2000年の10年間。

1971年に購入したドガのパステル画《踊り子たち》が、鈴木常司の印象派コレクション第一号です。これは、ポーラ五反田ビルが完成した年であり、その頃ロビーに配置するために購入した彫刻とのかかわりで購入したと考えられるものです。当時はこのビルの装飾品になるような彫刻を中心に収集しており、ドガのこの作品も、彫刻への興味がうかがえる量感のある表現が特徴です。

鈴木常司はその後、シニャックやセザンヌの小品を収集しており、印象派の大型の作品は求めていません。しかし、美術館設立を意識し始めてから、1990年以降、急逝するまでの約10年間で多くの印象派の作品を収集し、日本最大級の規模を誇るまでになりました。長い時間をかけて収集したことが、質・量ともに日本最大級のコレクションをなすことにつながったといえるでしょう。

- ルノワール15点(彫刻含む) ●モネ19点 ●ドガ9点(彫刻含む) ●ゴッホ3点 ●セザンヌ9点 ●ロートレック3点 \* 版画は含まない

### 鈴木常司略歴

1930年7月 静岡県に生まれる。1953年8月 経営学を学ぶため、アメリカに留学。マサチューセッツ州のウィリアムズ・カレッジに学ぶ。  
1954年1月 コロンビア大学入学準備のため、ニューヨークへ移る。同年3月、父、忍の急逝を知り、留学を中断。直ちに帰国し、社長に就任。父の遺業となった新工場の建設に尽力。1996年 会長に就任。2000年 逝去。